



No.53 2001.9
 (株)よかネット

NETWORK

ひともうけ通信7 合併で消えかかった村が、全国ブランドとして生き返った
 60歳以上の人たちが“生きがい農業・稼げる農業”を始め、
 ゲートボールは消えた…………… 2

中国の経済首都・上海はまだ元気
 ～6年ぶりに訪れた上海～…………… 6

障害者と一緒に福祉マップづくり
 ～ちょっとした工夫で利用しやすくなるトイレづくり～…………… 8

第1回福祉セミナー報告
 介護を受ける側の障害者だが、提供もする人のボランティア論…………… 10

「地域」と「機能」でつながるコミュニティ
 ～地域コミュニティづくりの取り組み②～…………… 11

ひともうけ通信～番外編
 いろんな“地元”とのつながりでみんなが集まった博多祇園山笠…………… 12

皆様から寄せられた「よかネット」への御意見、近況などの紹介②…………… 14

見・聞・食
 地引網と鳴き砂にふれた1日…………… 15

「国際青年の村2001in福岡」裏方体験談…………… 17

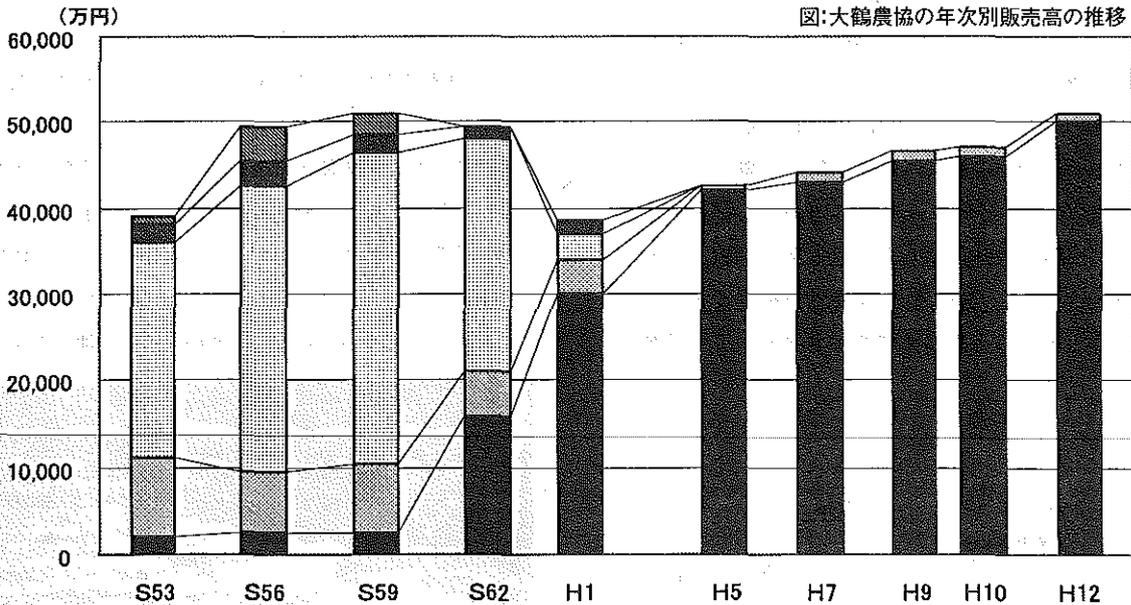
観光地の老舗、別府を巡る
 ～留学生とともに～…………… 19

近 況
 おもしろいことは何でもやってネットワークを広げる
 ～専業農家大いに語る 第3回～…………… 20

農業のサービス化がままならない
 ～意識ははまだカロリー製造・供給業…………… 22

本・BOOKS
 なんぞ嘆ぜんや ついに事業成るなきを…………… 23

●希望を失った村が“高齢者の生きがい農業”で生きかえった



※農協が合併したりしたために、データが不揃いになっている。年次が飛んだり、数値が概数だったりするが、ほぼ正確な数値である。

このグラフは地域の産業が劇的に転換したことを示している。その結果、農協も「数人で支える農協から皆で支える農協へ」と変わった。指導者を得て、一部の人ができる気になったのがS59～60年である。それまでの農協の販売高は3戸の食鶏、1戸の鶏卵、1戸の肉牛農家の売上げが大半を占めていた。そのうち食鶏農家には破産したところもある。S60年以降「米など」も減っているが、これは「金になる作物」を求めて、米の販売に力を入れなくなったからである。今この農協を支えているのは、200戸以上の農家で、売上げだけでなく、荒利も十分稼いでいる。
 (本文は2頁より)

合併で消えかかった村が、全国ブランドとして生き返った

60歳以上の人たちが“生きがい農業・稼げる農業”を始め、ゲートボールは消えた

糸乗 貞喜

昭和59年の春、大分県の農業改良普及員を定年退職した池永千年さんの所へ、大鶴農協の組合長と村の有志が訪ねてきた。これは、その時から始まった『地域の構造改革と再生』の物語である。取材は池永千年さんと、地元の農家三戸だけなので不十分ではあるが、とりあえず報告をする。

<組合長と村の有志が「村へ来て、村おこしの加勢をしてくれ」と言ってきた>

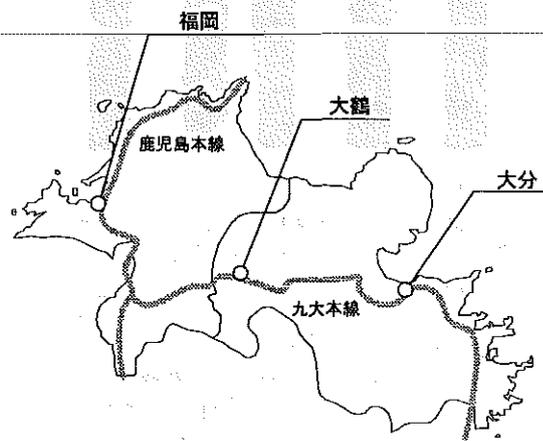
正確に言うと、組合長などが池永さんを訪ねてきたときに、村の再生が始まったわけではない。この発端は「このままでは、この村は生きて行けん」といって、村の長老が組合長にけしかけた時に始まったとも言えるが、池永さんは極力断っている。断られたときに一行は「一年がかりでくるから」と宣言して帰った。その後、月二回ぐらい訪ねてきて、その都度「また来るからな」と捨て台詞を残して帰った。「七回ぐらい来られたんですが、そうなるとう家族が、しばらく行ってあげたらどうか」と言いだした。池永さんは、昭和59年8月単車で出かけた。

長老達が「村がなくなってしまう」と心配した理由は、昭和30年の日田市への合併以後、大鶴の中心にあった店や飲食店などが、一斉に日田の中心部に吸い寄せられ、一挙に村が疲弊したことに端を発している。それがあったので、日田市の14農協が合併することになったとき、「この上農協まで合併させられたら大鶴は

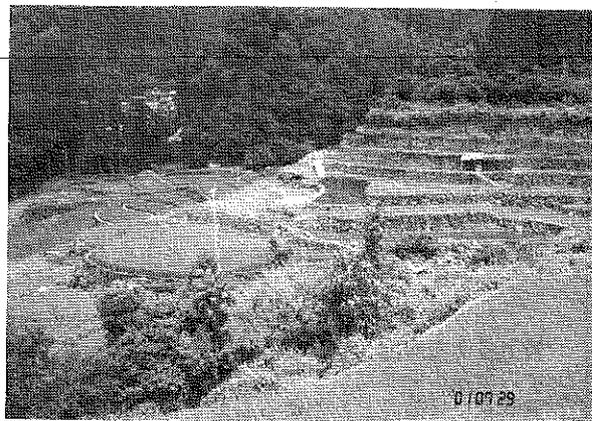
消えてしまう」と言って参加しなかった。それでも、農協自体も赤字で、地域も疲弊していった。

池永さんは農協の職員になる要請を受けたのであり、「給料はいくらいるか、一応20万円を考えている」と言われたが、「年金ももらっているので十万円でもいい。しかし調査費は使わせてもらう」といって営農販売部長になった。営農指導から市場への売り込みまでをやる仕事であった。

なぜこれ程までに池永さんが望まれたのか。そのことについて、「一村一品運動20年の記録」（大分県一村一品運動21推進協議会刊）の内容を見て紹介する。「ウメクリ植えてハワイへ行こう」で有名な大山村の運動が始まった昭和36年に、農業改良普及員として赴任した。役場の中にあつた普及所に出勤して矢幡治美村長（モメクリ運動の提唱者で中心人物）に挨拶にいったら、「普及所はいらん。きみもビートを勤めるとじゃろう」と言われた。矢幡は米麦と畜産が中心の時代に、農家に米と牛の追放を呼びかけ、県の奨励する（無惨な失敗を重ねていた）ビートにも皮肉を言っていた。と言いながらも、二人は気があって、7泊8日かけた果樹産地の調査旅行に出かけたりした。当時、矢幡は大山町の再生に賭けており、村役場の各課にあつた予算をすべて産業課に集めたりしていた。大分県は「米一俵増収運動」をやっているのに、大山村では“田んぼをやめて梅と栗を作る”とやっていた。大鶴の人達は、池永さんが、大



大鶴集落の位置



田と石垣のあせとどちらが広いかわからないぐらいの村が一戸一品にもえた。

山などの運動で果たしていたことを知っていたのである。

私は、「調査費は使わせてもらう」という池永さんのスタンスに感心した。どこの団体でも、調査費などというものは最初に削ってしまう。ところが、これを要求されたのは、大山の経験があったからかも知れない。

大鶴に行くようになって、最初にした仕事は「大鶴に向く農作物は何か」を見つけるための、大阪市場の調査であった。後に大鶴の小字集落で「池永さんはどんな人でしたか」と聞いたとき「売ることを真剣に考える人だった」と返事が返ってきた。

＜今さら何を教えるつもりか知らんが、もう何もせん。農業をやってきて良かったことは何もなかった——と取り合わなかった＞

大鶴農協に出勤した池永さんは、惨憺たるものだった。

「今更、年寄りに汗をかけというのか。農協のガキ共に何ができる」ともいわれた。

「三反百姓でやれるはずがない」。その三反の内30%が減反になっていた。

「どーせ、そう長生きはせんとじゃろう」

——何か生きがいはないのか

「ある。ゲートボールをやることだ」

——それだけか

「まだある。老齢年金をためて自分の年金で旅行に行くことだ」

何か、荒涼とした風景が、見えるようなやりとりである。何も進まないのに給料をもらうのは、池永さんにとって「塗炭の苦しみ」だった。「以前の職場の連中にも聞こえているし、進にすすめず、やめるも地獄」という状態になった。遂に胃潰瘍になり、ノイローゼのようにもなった。

ここで池永さんはハラをくくる。「430戸あるんだから、一人や二人はいるはずだ。やる気のある人間を捜そう」と考えて、小さな村をシラミツブシに回って対話をし村人の心を探った。百日間まわって十人見つけた。十人を相手に「汗を流せ。必ず報いはある」と言っ、十軒以外は取り合わないことにした。「やる気のない人の説得はできん。実証して見せるしかない」と思い、十人で取り組んだ。

もうひとつ大事な方針がある。別項の囲みを見ていただきたいが、高齢者にできる農業として、「軽労働・技術的にも優しい・輸送コストがかからない・品質管

理がし易い」をあげている。小規模産地の、老人がやれる農業は何かがテーマであった。例えば、キュウリは重いうえに、少し曲がっていると売値にひびくし、生産者側の選別は難しい。一方、チンゲンサイは微妙な差がでにくい。このような考え方からでてくるのは、当時「特産地形成」の名の下で唱えられた、少品種大量生産の作目ではない。その逆の他品種少量生産となる。少量生産品は量が少し多すぎると、大幅に値崩れが起こる。市場情報が決め手で、それに池永さんは強かった。

＜まず一点突破のために、8人が春ゴボウに、2人がセリに取り組んだ＞

8軒は稲刈りあとの田んぼの土盛りをして、秋植え春採ゴボウを作った。テストに5aから3aを作ってもらった。目標があると人間は元気がでて、夜明けにはもう畑に行っているようになった。春になって福岡の市場に出したところ、お祝儀もあったのか、一本が百円になったりもした。5aで25万円になる人もいて、みんながびっくりしてしまった。その頃の国の裏作奨励品種は小麦で、十数人がやっていたが、4～5万円/反程度だった。

こうなると8人は燃えた。

秋の来るのを手ぐすね引いて待っている。

しかし、市場からは「品質はいいが、量が少なすぎて、頼りない」と言われた。

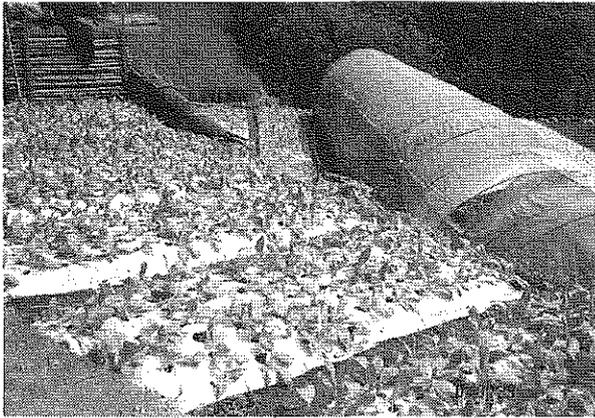
8人に「自分が儲けた話を、近所に吹聴して回れ」と言ったら、8月の準備の頃には、希望者が32人手をあげた。秋には「ゴボウ部会」がスタートした。二年池永さんが提案した営農方針（S60年）

○ 営農振興の基本方針

- (1) 水田転作を中心に人づくりによる営農活性化
- (2) 高齢者・婦人を中心に軽労働で働き甲斐のある営農の確立
- (3) 軽薄短小な野菜の少量多品目システムの確立
- (4) ハウス導入による高級野菜の多毛作化
- (5) 市場別個性の発見と高品質出荷によるブランドの確立

○ 多品目開発の基準

- (1) 軽労働生産の可能性
- (2) 生産技術の難易度
- (3) 輸送コストの軽減性
- (4) 個別選別の単純性



こんなせまい畑（田）でもチンゲンサイ

目も、ほぼ同じ成績だった。三年目には65人になった。産地の生産量というものは、生産者の数と規模の掛け算である。ゴボウの場合最大で6反の人もいたが、高齢者農業で考えるなら人数を増やすしかない。三年目で産地らしくなった。

一方、セリの方は、村で一番耕作条件の悪いところの集落の2戸に作ってもらった。ここは石垣の棚田で、石垣より田の幅の方が狭いような田で、用水は湧いてくる清水である。米も5～6表/反でしかない。この辺りは、きわめて立地条件の悪そうな集落名が多い。山際、日陰田とか平寒水（ひらそうず）などである。孟宗竹でビニールハウスを作ってやってみたが、1戸は水が張ってしまって失敗した。

もう一戸の方はビニールの中での作業は寒くはなく、洗う作業なども一坪のビニールハウスを作って、その小屋でラジオを聴きながらやるようにいったのでこんな楽しい冬はなかったと言っていた。

大阪市場での評価も高く、値も付いた。1aで米10a分の収入が得られたので、2戸とも来年もやる気になった。そして今では30戸以上がやっている。品質がいいので、東京・大阪市場とも、大鶴農協が広域合併農協に入ってしまった今も「大鶴農協」名前で出さないとよい値はつかない」と言ってくれている。

「村おこし」は、先ず一点突破から始まる」と池永さんは言う。始めから全体をとというのは無理で、先ず「目にものを見せてくれる」ことが必要のようだ。二年目には、他の年寄りが「私にも作れるものはないか」といって来た。

「少しでも売ってやる」と言ったら、2年目には20品目ぐらいになり、3～5年目には50品目ぐらいになり、今では更に増えている。ハーブ類、エンダイブ、

ウイキョウ、マーシュ、チンゲンサイ、ターサイ、ツルムラサキ、シャンサイなど、なかなかハイカラな農業地帯になっている。

「調査費は大いに使わせよ」と言ってあり、必要な調査は惜しまないというものの、大阪市場への電話代だけで農協がビックリしてしまった。ところが、大阪の市場が大鶴の農産物に惚れて、しげしげと大鶴に来てくれたり、競り市にかけるときに部長が品物を揃えてくれたり、少量産品の情報をくれたりした。

<講習会に欠席届が出た——成功は会合の意識改革から>

私が驚いたことは、会合を昼にやっていることだった。一般に農村と商店街は夜8時頃からの会合が多い。ついつい、ビールを飲んだりしてくる人もあったり、なかなか調子がそろわない。しかしここ大鶴では、午後1時半から3時頃までと決まっている。忙しいなら来なくていい、「3人でも始める」ということにしていたら、1年以内に大鶴時間はなくなった。“どんな作物を作り、どんな商品にし、どう売るかということ以上に大切な仕事があるはずがない”という池永さんの自負が表れているように思った。よく考えてみれば当然のことではある。

調査費は惜しまないことになっており、ここの農業グループに入っていると、勉強しなければならぬ機会も多い。講習会も始めは参加しない人も多かったが、“出席しないと損をする・良い商品づくりが出来ない”ということが分かり出すと「実は親戚に病人が出たのでやむをえず……」と言って欠席届が出てきた。講習会は強制しているのではないので、逆にビックリしたりした。

市場見学に行くときも、重要な学習チャンスである。以前は、農協が連れていく見学は、帰りのバスの中での酒飲みカラオケ大会に重点があった。池永さんは、これをなんとか止めさせようと思って、酒を積み込まないようにした。

朝3～4時頃出発して5時頃から市場を見学し、それが終わってバスで帰途についたとき、池永さんは「それでは今日の反省会を、○月○日の午後1時半から行いますので集まって下さい」という。「また集まるのか」と不服そうな顔をする。そこで「今日これから帰るまでに2時間ぐらいあるので、今することもできるが……」という、「そうして欲しい」という声が出る。

そこで、全員に順次マイクをわたして、感想を言わせる。なかには、「今の意見と同じだ」などという人がいるが、その時は「同じなら、同じことをもう一度言ってくれ」といって話させる(この同じことを言わせるというやり方に感心した)。全く同じと言うことにはならない。多数の意見が自ずと明らかになる。

これを受けて、池永さんは、みんなの話を引用しながら、市場が何を求めているか・値が決まる要因は何か・消費者はないを求めているか・品目によるロットなどの違い等々について話していく。大鶴に帰るまでに「どれか一つの品質が悪いと、競りの当たり具合によっては、みんなの値が下がってしまう」などについても議論する。帰る頃には品質管理などについても意思統一ができる。そればかりではなく、帰ったら、今日の勉強を土産話として家族に話すので、大鶴全体の品質管理が目に見えて良くなる。

集落のなかで「あなたも東京の市場へ行ったのですか、朝早くホテルを出るのですか、前の晩は宴会などしますか」と聞いたら、「いや前の晩には、市場から来て話をする。朝は市場のなかで人がごった返しているなかを、遠慮しいしい見て回った。見学のあとで、また部長さんが来て話す」という話。また別のところで老夫婦が仕事をしているところでは、「東京の市場はどうでしたか」という質問に対して「いや、東京はアレが行った。わしは大阪と広島に行った」。「奥さん東京はどうでしたか」、「市場のなかはごった返していて、もう……」と言いながら市場のシステムを見てきている。大量の品物の競りでは、1ケースの競りで数十箱の値が決まってしまうことも分かる。全員の品質管理の重要性が、肌を等して認識される。

これらの学習を通して、大鶴の品質が上がり、日田広域農協へ合併したあとも、市場から「大鶴」というブランド表示を求められる素地が出来てきた。

<240戸が一戸一品運動に参加——成功の秘訣はバアチャンがはまって、男女共同参画社会になったこと>

「今までトウチャンは、何も言ってくれなかった。仕事手伝わせるだけで、金が入っているのかどうかも全く言ってくれなかった。今は金が取れとるのが分かる」とバアチャンが言った。

大鶴では、既に述べたように、市場見学にバアチャンも行っている。見学の勉強を、家族全体で生かすよ

うにしている。

農業が親父だけの世界ではなくなっている。戸数、人数が増え、若妻達が参加して平均年齢も下がった。いちいち帳簿を付けなくても農協の通帳を見れば何がいくらで売れたかが分かる。バアチャンの働きも、一目瞭然だ。まさにここでは“男女共同参画社会”はもちろんのこと、“地域共同参画社会”にさえもなっている。

大鶴では一戸一品が始まって十数年たっている。当初60才ぐらいだった人は既にリタイアしているはずなのに、人数は少し増えているのはなぜか、と聞いてみた。こういう多品種少量生産の所では、参加者が減るとヴォリュームが上がらず市場も困る。そこで、定年で帰ってきた人に参加してもらうことにした。その中には郵便局長だったり、教師だった人もいる。交代が進むので、家は変わっても全体の数は変わっていないということである。

<大鶴農協の構造改革は、一部の人の農協から地域全体の農協へ>

一戸一品の取り組みのなかで、大鶴の構造がひっくり返ってしまった。昭和60年までは、農協扱いの販売額5億円のなかで、青果は5%、米15%、食鶏70%、鶏卵と肉牛10%だったのが、今では青果が5億円位になり、食鶏は消えてしまっている。以前は、食鶏が3戸・鶏卵と肉牛がそれぞれ1戸で、農協は5戸に寄り掛かっていたことになる。今では240戸が、多品種少量生産で高品質の青果を送り出している。文字通り、一戸一品が地域の柱になっている。

終わりに、池永さんとこれからの農業について話した。

- ・今までは日本だけを見ていればよかった。今後は外国もある。棲み分けの考えもいるのではないかと
- ・大量生産品は、日本では不利だ
- ・多品種少量生産の考えもいる
- ・産地ブランドが必要だ
- ・産地づくりの柱は、“安心・安全”だもう一つ、気になることがあったので、ついつい聞いてしまった。「大鶴は、なぜこれ程、みんなが一つになって成功したのか。別の地域で、講演などされたことはないのか。そこでもうまくいっているのか」である。回答は「大鶴は村づくりに悩み抜いた末、1年で10人を育てることができたことと、販売の世話を農協がやれたことが

大きかった」。

最後に、私の感想を一言述べると、「悩み抜いた」人々のなかに、池永さんの存在が大きいに思えた。村人も追いつめられていたが、それ以上にコーディネーターも追いつめられて、「村の中をさまよひ、10人を探した」ことがカギのように思った。

(いとのり さだよし)

中国の経済首都・上海はまだ元気

～6年ぶりに訪れた上海～

山辺 眞一

1995年6月、社内外のメンバーで北京、上海の視察に行つて以来、6年ぶりの上海を見に行つた。きっかけは昨年米国西海岸視察のメンバーが集まつた時だった。

●上海を見に行こう

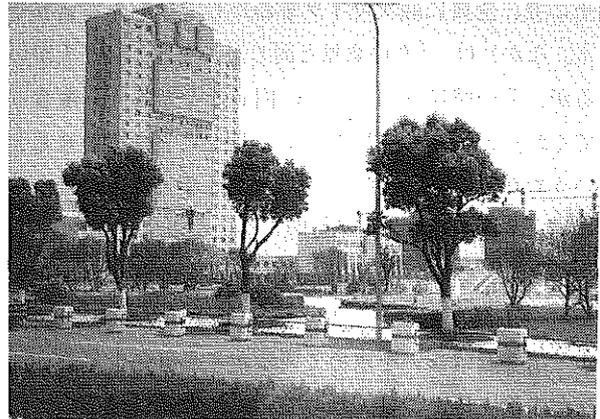
西海岸視察の際の数人のメンバーで、2カ月に一度くらいの情報交換会(福岡、北九州、久留米など)を行っている。6月の北九州での会合の際に、福岡県の観光ミッションが北京、上海で開催されるという話が出て、上海の成長の凄まじさが話題になった。特に、パソコン、ソフトウェア関係は日々変化しているので、一度見に行こうということになり、今回の上海視察となった次第である。

前回の視察は北京と上海の両都市の都市開発状況を中心テーマにしていた。今回は、ベンチャー企業、特にPC関係の企業を中心とした視察である。7月16日から7月20日の5日間を上海で過ごした。

●浦東から昆山、蘇州へ広がる経済開発

JETORO上海の資料によると、上海市の国内総生産は2000年で約4,600億元、約72,000億円(現在100円が約6.5元)と言われている。福岡県の県内総生産は1997年で約188,041億円であり、上海市は福岡県の約38%の経済力を持つ地域に相当する。

このうち、上海市の第二次産業は2,200億元、第三次は2,300億元を占め、経済特区として開発されてきた浦東新区の総生産は、第二次産業の22%、第三次の19%を占めている。しかし、上海市への海外からの投資はまだ続いてはいるものの、周辺の地域に新たな開発地区が形成されており、とくに、蘇州方面への投資



蘇州郊外開発区の中心

が増加している。

空港のある虹橋地域から西に、高速道路で1時間以内の昆山や蘇州郊外での開発が盛んになっており、シンガポールとの合併や台湾企業からの投資が増えている。

●成長を支える若年人口の流入

上海市の経済発展、雇用力の増加をあてにして、周辺の農村部や市外からの流入人口が増加し、今の上海市の人口は、約1400万人、このうち半分が市区部など外環道路(建設中)内に居住している。しかし、ガイドさんの話によると、全ての人々が戸籍を持っているわけではなく、職を求めて外から入ってきた流入人口が相当あり、正確な人口は把握できていないようである。

市街地の土地開発は、70年間の借地によって開発が行われているもので、市街地の内環道路付近には新しい高層マンションが次々と建っている。しかも、上海の経済成長によって、こういうマンションに入居できる人々がどんどん増えている。一方、建替前に住んでいた旧住民には、郊外の新しい住宅が提供されるケースもあり、喜んで移転していく人も多いとのことであった。これら高層ビルのそばには、低層住宅の密集する市街地もまだ存在するが、いずれ高層住宅に建替えられてしまうようだ。

今、上海の市街地には、30階建て以上の高層ビルが3300棟以上あると言われている。とくに無料の都市高速道路である内環道路を走るとその壮観なビル群がいくつも見られる。前回の視察の時にはこの道路は完成していなかったが、この道路の完成で、高層ビルが次々と市街地に登場してきた。今度行ったときには、すっかり古い居住地が無くなっているのではないかとと思うほどエネルギーな街である。



内環道路からみた市街地一手前に低層の古い住宅街、向こうが高層マンション地区

一方、周辺部の農家では、農業の跡継ぎが居なくなっている。都会の職に憧れて都市へ職を求める若者が増加している。しかし、農地の契約期間は30年ということであり、今農業をしている世代で、農業を止めてしまう農家も相当数いるだろうという話だった。上海郊外、周辺の農業地域は、今は上海市の食糧供給地域として重要ではあるが、いずれこの地も開発され、様変わりをしてしまうのだろう。

●成長する上海ベンチャー企業

今回の視察先は、ソフトウェア、パソコン関係の企業だった。その中で、上海政府のサポートを受けているベンチャー企業7社のうち、2社のハイテク企業を訪問した。この認定を受けると、3年間は無税となり、4年以降は通常17%ぐらいの税金が半分になるそうだ。日本に限らず、中国でもこういうベンチャー企業育成に力を入れ始めている。

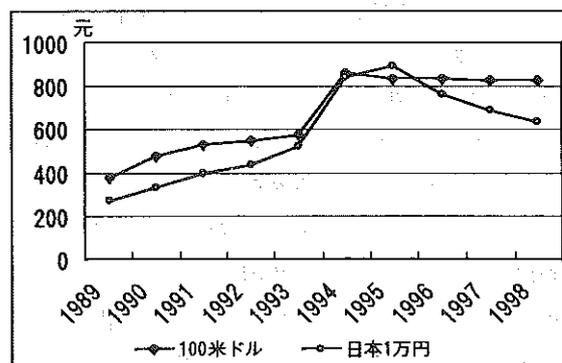
いずれもソフトウェア開発の企業であったが、いずれも急速に成長している企業であった。とくに、N社は、昨年から毎月10人ずつぐらい増えていて、昨年当初の130人から、一年で100人増やしている。

もう一つのF社は、売り上げを前年1億元から、今年は2倍の2億元を目標にしていた。当然人員もそれに合わせて増員する予定である。

この2つの企業が上海のベンチャー企業の姿とは言えないが、ベンチャー系は、すごい勢いで人員を増やしているようである。一時期の日本のネットベンチャー景気を見ているような気がしないでもない。

人員の評価については、新卒でも中途採用でも仮採用の期間で能力評価を行い、正式採用で給料が決められている。ちなみに、新卒の給料はソフトウェアでだ

為替レートの推移(中国国家统计局資料より)



いたい2000元(約3万円)、メーカーのエンジニアで3000元(約45千円)ぐらい。今の日本の初任給がだいたい20万円とすれば、約1/6程度である。

視察に同行してくれたガイドの話によると給料は新卒とあまり変わらないようであるが、他の地域と比べてお金のかかる上海で暮らしていくには十分とは言えない新卒の給料のようである。

●このまま続くのか円の下落

日本との為替レートは、前回訪れた1995年は1万円が約900元だったものが、今回は約650元にまで円が下がった。物価は、向こうの自動販売機のコーラなどが1元だから、レートでみれば、日本の15円くらいだが日本の実質価値100円だから、中国の生活コストは、日本の1/10程度であろう。つまり、中国の新卒給料2000元、日本円約3万円は、生活実態としては、日本で言えば30万円ぐらいの給料に相当すると思う。

参考までに、10年前からの為替レートをみると、前回訪れた1995年をピークに日本円は急激に低下している。しかし、米ドルはそれほど下がっていない。日本からみて中国での生産コストの低さは企業にとって大きな魅力であったが、経済力の実態を反映する為替レートを見る限りは、日本と中国の新たな関係の構築が必要な時期もそう遠くはないような気がする。

●江沢民主席の出身地上海であることを直に感じた

視察の後の夜の話を最後に一つ。

上海は江沢民主席の出身地であり、公安の取締りも他に比べると厳しいという話であった。初日にあるカラオケ店に行った時のことである。日本と同じように複数の団体が入れる部屋があり、我々もその一室を陣取った。一人ひとりにホステスさんが付く。上海出身も居れば、地方から来ている人もいる。日本でいう

とクラブみたいなものである。時間は忘れたが、天井の灯りの一つが点滅した、すると一人の女性を残して、蜘蛛の子を散らすように(まさにこの言葉のとおりである)皆が部屋から逃げていった。我々はみなどうしたんだろうと思った。残った女性が言うには、灯りの点滅は、公安が店に来るという合図で、こういうカラオケボックスのサービスの場合は、部屋に一人ずつしか女性が居てはいけないという規則になっているため、皆が退散したそうである。しばらくすると、皆が戻ってきたが、こんなところで、公安の取締を体験するとは思わなかった。江沢民主席になってから上海の公安の取締は厳しくなったそうである。(やまべ しんいち)

障害者と一緒の福祉マップづくり

~ちょっとした工夫で利用しやすくなるトイレづくり~

山田 龍雄

平成11年~12年度に福岡県新宮町の障害者(児)の計画づくりのお手伝いした。この計画を策定する上で、「電車に乗るぞ・障害者の会」の代表者として長年、障害者が利用しやすい交通機関や公共施設について活動してこられた李さんにお会いした。障害者の困っていることや悩んでいることなどの話を聞く中で、新宮町でも福祉マップみたいなものを作れないかといった話しをした。同じ時期にボランティアローディネーターをしている内野さんも障害者が利用できるトイレの場所などを示したマップの必要性を感じていた。

このような両者の思いが一致したことから、李さんの協力のもと町のボランティアセンターの呼びかけで、今年の4月より参加者20数名で「新宮町福祉マップをつくる会」を発足した。月に2回程度の頻度で調査をし、8月現在でやっとマップの原案ができそうなところに達している。

この福祉マップは、主に不特定多数の人が利用する公共的建築物(役場、金融機関、福祉施設等)や民間の店舗や飲食店に絞り、車椅子利用者や高齢者の方に対するバリアフリーの状況(出入口の段差、スロープの有無、トイレの状況、EVの有無、通路幅等)を調べたものがある。

私も障害者の方と一緒に調査をすることによって、普段では見落とすところを、気づかせていただいた。



段差で車椅子利用者ができないATMボックス

その一つがタイトルに挙げている「ちょっとした工夫でトイレの改造ができる」ということであり、その他、一緒に調査した中で少し印象に残っている点をご紹介します。

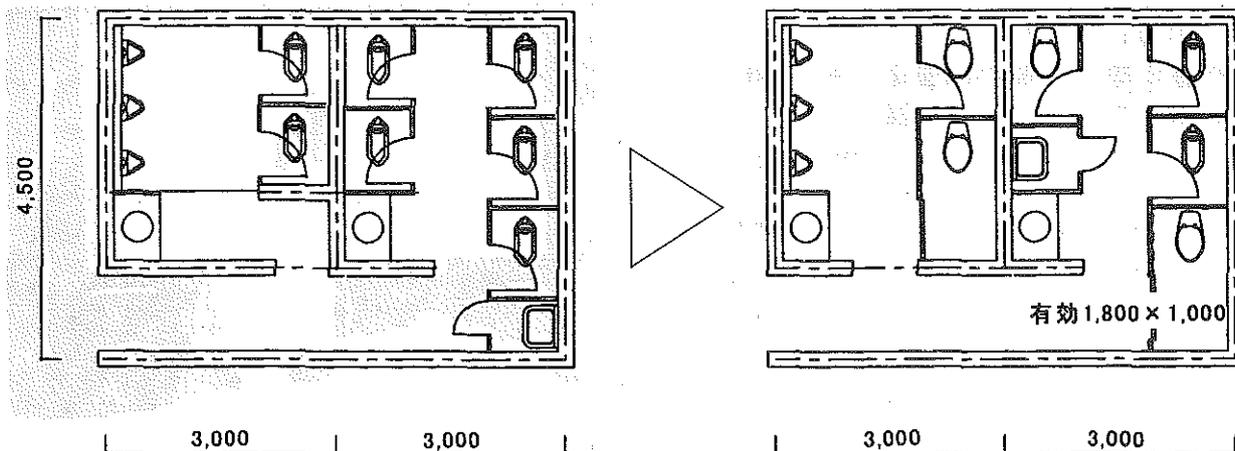
●洋服店の更衣室、ATM(自動現金・預け入れ装置)ボックスは車椅子は利用できない

ある広めの洋服店で調査したときに気づいたことだが、試着用の更衣室にはゴミが入らないようにするためなのか、必ず段差が設けられている。これでは車椅子利用者は一人では試着できないし、高齢者や足の不自由な方も不便と感じた。これなどは、段差を低くし、スロープを付ければ簡単に改善ができるものである。

また、最近、別棟形式で2m程度四方のATMボックスが設置されている。これも15~20cmの段差があり、車椅子利用者は全く利用できないものである。これらのケースは李さんたちと一緒に回っていると「これは利用できないね」という一言で気づかされるのである。

●バリアフリー化は公共の建物に比べて、民間は非常に遅れている

現在、福岡県や福岡市では「福祉のまちづくり条例」を制定しており、新規の公共的建築物のバリアフリー化はかなり進んできている。特にトイレは、多目的トイレという名称のもと、広さも2×2m程度の立派なものが整備されている。新宮町でも最近オープンしたコミュニティセンター「そびあしんぐう」の多目的トイレでは、出入口の壁に設置されているセンサーに手を当てると自動的にドアの開閉ができるようになっており、照明も自動となっている。車椅子利用者には極めて便利がよい。一方、民間の建物では出入口から段差があるもの、ましてトイレは狭いといった状況のも



事例1：スペースに余裕のあるパチンコ店のトイレ改造

のが多々あり、バリアフリーという観点からみると公共の建築物に比べて非常に遅れていると感じた。

これはオーナーの障害者に対する意識がないといったこともあげられようが、民間施設の設計者自身もバリアフリーに対する意識が弱いのではないかと思う。

私自身も20数年前に、一応は建築を学んだのだが、高度成長の時代でもあり、このバリアフリーという視点での教育は全くなされなかったと記憶する。今、設計者の大半は、工事費が少しはかかるバリアフリー対応の設計をオーナーに説得する意欲が最初からないのか、高齢者や車椅子利用者が活発に動き回っていることに気づいていないのかのどちらかであろうと思われる。

●車椅子利用者の方の宴会場所の第1条件はトイレ

車椅子を利用している障害者グループが宴会をする時の場所決めが大変らしいと教えてもらった。料理の種類や値段は二の次らしく、先ず車椅子でもスムーズに入れるトイレがあるかどうか第1の条件となるようだ。私たちが調査した中で民間のレストランや居酒屋でトイレが入れるところは数件ぐらいではなかったかと思う。トイレの出入口も広く段差がないトイレでも肝心のトイレブースのドア幅は50cmと狭く、一人では到底利用できないものがほとんどである。

●民間施設のトイレ改造の提案

民間の施設、まして小さな店舗では公共建築物にあるような立派なトイレを設置することは不可能であるし、また必要がない。

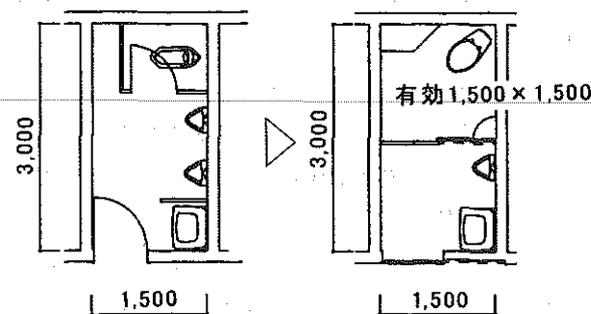
李さんに聞くと「最低限電動車椅子が入れる70cm以

上（電動車椅子の横幅約620cm）のドアがあり、長さ1.8m～2.0程度（電動車椅子の長さ約105cm）のトイレがあればよい」とのこと。

レストランであれば客席のスペースを、1×1mだけ削ることによって車椅子利用者が入れるトイレができるのである。このことから民間施設では出入口の段差解消と併せて車椅子でも最低限利用できるトイレを設けて欲しいものと思う。（スペースの余裕があれば男女別々に）

調査している中でパチンコ店やレストランなどでスペースに余裕のあるトイレが見受けられたが、車椅子での利用は全く考えられていないところもあった。

そこで、調査した民間施設や古い公共施設の中でスペースには余裕があるものの、車椅子利用者のトイレがないものについて、改善案を考えてみた。当初より少し工夫すれば、車椅子利用者はもちろんのこと高齢者も利用しやすいトイレになるものと思う。



事例2：レストランで少し余裕のあるトイレの改造案

(やまだ たつお)

第1回福祉セミナー報告

介護を受ける側の障害者だが、提供も
する人のボランティア論

澤谷真紀子

7月より毎月1回の予定で福祉セミナーを開催します(3~4回の予定)。第1回は7月26日に「『ボランティア』っていったい何?」というテーマで山下恭平氏((有)ケアライフコーポレーション代表)にお話しいただきましたので報告します。興味のある方は今後の案内を送付しますのでご一報下さい。

●足は不自由だが口は我々の10倍位元気がよい
ご自分でも仰る通り、口は何倍も動く。しかし、それ以上に様々な仕事を経験されて動き回っている。

現在は介護支援事業所((有)ケアライフコーポレーション)の代表を務める傍ら、大学で「ボランティア論」などの講義を受け持っている。社会福祉協議会での嘱託職員、ボランティアコーディネーター、八女市議員を経て現在に至っているそうだ。

そのため、ボランティアを取り仕切る側の立場も、介護を受ける側(ご自身も乳幼児期のポリオにより肢体不自由である)のこともわかる、また、介護を提供する側もトータルでわかる頼もしい方だ。

山下さんの話で、特に「なるほど」と思ったことが2つあるので紹介したい。

●ボランティアからサービスを受ける障害者にも
ビシッということは必要だ

山下さんはボランティアの要素として「無対価」「自発性・自由意思」ということをいわれたが、ボランティアの費用弁償はきちんと行うべきだということを強調された。

例えば、以下のようなことが言える。

- ・1泊2日でボランティアに来て欲しいときは、ボランティア分の宿泊代をサービスされる側が支払うのは当然だ。
- ・ボランティアサービスを受ける側が「火事になったときには、自分はおいて逃げてくれ」と伝えること。受ける側には受けるなりの覚悟が必要だ。
- ・送迎ボランティアなどは車検の費用まで含めてkm当たり30円程度はもらう必要がある。

このようなことは、ボランティア活動が継続性を持つためにも、サービスを受ける側の自立を促すために



口は我々の数倍元気な山下さん

も必要なことだ。

サービスを受ける側に対し、その心構えをきちんと行う市町村は少ないだろう。対価なしのボランティア活動を継続させ、サービスを行う側・受ける側の気持ちのよい関係が続くためには、これがポイントとなっているようだ。

●ボランティアの可能性

地域福祉をリードする存在がボランティアであるということと言われた。

福祉は、措置から介護保険へ移り変わってきている。行政が与えるものから、民間が行うサービスへ変わってきた。サービスの多様性として、行政が最も小さく核の部分だとすれば、その輪の外に民間、さらに外にNPOや、ボランティアの輪があり、常に住民ニーズに直接触れている。

このニーズから生まれたサービスが行政サービスまで広がり、普遍化することによって新たなサービスが生まれる。これを繰り返すことで地域の福祉サービスは確立される。そのためにボランティア活動は重要なのだということだ。

では、活動しやすい土壌をいかに作っていくのか、また、ニーズをどのようにサービスに転化させていくのか、介護保険サービスにはない地域の問題を解決するためには等、地域がボランティアと助け合い、連携しながら解決しなければならない課題はまだ多いようだと感じた。

(さわたに まきこ)

「地域」と「機能」でつながるコミュニティ

～地域コミュニティづくりの取り組み②～

伊藤 聡

地域組織の形成、地域コミュニティの形成について
 どういうことに困っているか、何が問題かという部分
 を、福岡県〇町での調査事例を参考に整理したい。

●古い開発団地は農村集落より高齢化率が高い

〇町は人口約3万人のベッドタウンであるが、古く
 からの農村地域や漁業集落もある。自治区の数54区
 あり、最も大きい区は723世帯2,290人、最も小さい区
 は29世帯65人、平均的には約190世帯560人である。〇
 町では区および区長という呼び方をしているので、以
 下それに従う。

高齢化率をみると、最も高いところでは44.0%、次
 に40.6%という区があるが、これらはいずれも昭和40
 年代に開発された住宅団地の中の区である。農漁村地
 域でも高齢化率は確かに高くなっているが、それでも
 30%前後であり、同年代が集中する開発団地ほど極端
 な高さは示していない。ちなみに高齢化率の低い方は、
 5%未満の区が3つあり、これはここ数年以内に開発
 された住宅団地の区である。

●長期政権と持ち回りの一長一短

区長にアンケートを取った結果では、区長の年齢は
 60～64歳が17%、65～69歳が50%と60歳代が3分の
 2を占め、退職後間もない人たちが区長を務めるケー
 スがかなり多いと分かる。残りのうち24%は70歳以上
 である。区長に限らず、役員等も含めてだが、後継者
 の確保には苦労している区が多いようであり、「後継者
 がない」と答えた区が3割あった。高齢化率の高い
 地区では、実質的に動く体力のある人が減り、活動が
 滞りつつある区もあれば、新しくできた団地ではほと
 んどの人が仕事も現役で、地域の役員等に関わる人
 が少ないという区もある。

区長は本来、ある程度民主的な選出の仕方をするべ
 きではないかと思うのだが、体制の不十分さややる気
 のある人の不足などから、同じ人が長く区長を務める
 長期政権化や、区の中の組などで1～2年で持ち回り
 する当番制が多くみられるようになっている。

長期政権も当番制も一長一短ではある。長期に区長
 を務める場合、区長が地域の実情を良く把握し、方針

を持って自立運営を行えば、地域は安定してかつ活発
 な地域活動を展開することができるが、一方で権力が
 増大して地域住民が意見しにくくなったり、行政や議
 会と対立的になったりすることがある。

持ち回りの当番制の場合、様々な人が地域活動に関
 わるきっかけを与え、人材の発掘などにつながる可能
 性があるが、たいていの場合、引き継ぎをしていく間
 に役割が縮小される。地域の人々の意見を聞く、ある
 いは対策を考えるといった、ある程度の能力を要する
 役割は当番制の性格上継承されにくく、回覧板を回す
 などの文書事務的な役割だけが残っていく。事務的な
 ことだけでも区長は相当忙しいという声も根強く、地
 域の自立を図る上では行政側にも事務委託の部分を見
 直す必要も出てくると考えられる。なにか、地方自治
 体における機関委任事務と似たような構図が感じられ
 る。区長の役割継承とレベルアップのためには、行政
 か区長会のようなところでの研修なども必要になって
 くるだろう。

●「地域型」と「機能型」の活動

区の中には老人会、婦人会、子ども会などの様々な
 団体がある。一方で、文化活動団体や子育てサークル
 など、区をまたいであるいは区の単位とは関係なく、
 目的に応じて集まり、自分たちの好きな活動や必要な
 活動をしている団体がある。

これまでの地域活動が縮小してきた背景のひとつに
 は、地縁にしばられた活動や義務が発生して、その堅
 苦しさや煩わしさが敬遠されるようになった、という
 ことがある。だから、コミュニティの活性化を昔のよ
 うな地縁活動に戻そうというのには無理がある。いろ
 んな人が参加しやすく、活発な活動が展開されて地域
 の自立が進むためには、区などの地域住民全体を対象
 とした活動と、区を超えて目的を重視する活動と両方
 が必要である。〇町の担当者はこれを「地域型ボラン
 ティア」と「機能型ボランティア」として整理してい
 た。ボランティアとは言い切れない面もあるので「地
 域型活動」「機能型活動」(あるいは活動団体)とす
 ると、地域型活動が機能型活動をうまくとりこみ、ネッ
 トワークしていくことがコミュニティの活性化につな
 がると思われる。

例えば少子化の進む地区では、子育て世帯が少なく、
 子育て支援サークルなどが区の中で結成できないところ
 がある。そのような場合でも、いくつかの区(隣の

区でもそうでなくても良い)の住民が連携して子育て世帯が集まり、サークルを作ることができる。このように機能型活動は地域型活動を補完していく関係になりうる。

●ひとづくりを活かす組織とフィールド

もうひとつ、別の視点から述べると、O町では「ひとづくりからまちづくりへ」ということで生涯学習のまちづくりを進めてきた。いろんな講座や文化サークルなどの学習活動が活発になることで、町民の意識や能力は高まってきた。しかし、それがまちづくりにつながっているかと言えば、はっきり見えてこない面がある。楽しいことがあるというだけでなく、住みやすい地域になった、という部分につながらなければ、まちづくりというレベルとは言えないと思う。

例えば、地域リーダー育成の講座を受けた人たちは、卒業してもなかなか活躍する場がない。活躍する場にあたるのは、何らかの「組織」と「フィールド」であると思われるが、その両方を持つもののひとつとして自治区がある。そこが地域の人材の活躍の場になっていけば、地域の活性化につながりやすい。

生涯学習などを通じて住みやすくなるということは、一人ひとりの能力が高まるだけでなく、周囲の人とのつながりに活かされるかどうか、あるいは福祉的な面を持つかどうかにかかっている。都市部だけでなく農村でもみられる緊張感でつながる近隣関係が安心感へ変わっていくと、少しは住みやすくなる。隣近所と仲良くなるには、市町村単位ではやや広すぎ、もう少し身近な範囲での地域活動が展開される必要がある。それは例えば、地域で行う文化講座だったり、スポーツだったり、清掃活動だったり、高齢者の見まわり活動だったりする。

●市町村合併の視点から

ところで、現在各地で進められている市町村合併からみても、自治会を始めとするコミュニティ組織を強化し、自立する力をつけておけば、自治体の規模がどう変わろうとも、役場が遠くなったとしても、地域の人たちは暮らし安さや安心感を維持していける。もし合併すれば、現在の市町村はなくなるが、自治会などの組織は多分そのまま続いていく。合併という大きなくりの論議が起こっている今だから、余計コミュニティなどの小さなくりを考える必要があるのではないだろうか。(いとう さとし)

人もうけ通信～番外編

いろんな“地元”とのつながりでみんなが集まった博多祇園山笠

尾崎 正利

私は縁あって博多祇園山笠にこの数年参加させていただいている。今年も7月15日の追い山で無事に櫛田神社への奉納に参ることができた。山笠に参加していると、いろいろなことを聞かれるようになったが、その中で「山笠に参加しているのはどんな人達か」という素朴な質問にはなかなか答えられないでいる。

その大きな理由は、山笠期間中は自分の流れ(私の場合は恵比須流れ)に参加することに目一杯で、ケガをしないようにして楽しむため、自分の身の安全に注意を払うので、意識が祭りの全体像の方に向かわないためである。もう一つの理由は、全体像そのものの輪郭がぼんやりしていて正確にはつかみにくいためである。

年ごとの変化があっても一概に言えないが、一説では7つの流れで計1～2万人の舁き手が参加する。例えば、私が参加している恵比須流れの中石堂町は、山笠のルーツを担う古い町だが、今は住む人も働く人も減っているが、人づてのご縁によって博多の出身や在住でない人でも、この町から参加させていただいている。

今回、自分の所属する中石堂町だけでなく、他の流れに関わっている方など、私にとっての山笠の先輩数名に山笠の舁き手事情を聞いてみることにした。

●山笠はいろんな人の参加を受け入れている。そして参加者全員が「自分の流れと町が一番」と考えている。

聞いてみて気づいたのは、どの流れのどの町の人も「自分の流れ、自分の町の法被、自分の町の結束がやっぱり一番」という気概を持つ点で一致しているものの、山笠に参加している人の受け入れについては、様々なケースがあるということだ。

それらのケースを見てみると次のようになる。

- ①旧町内で生まれて在住している。
- ②旧町内に住んでいないが商売の場所は持っている。
- ③旧町内で生まれたが、離れて市内外のどこかに在住。期間中には戻ってくる。
- ④仕事場が旧町内にあってそのご縁で出ている。

⑤旧町内とのご縁はないが、声をかけられて出ている。

⑥旧町内とのご縁はないが、どういう形でか縁をただって自ら進んで参加する。

などである。

いわゆる「博多のもん」つまり地元の者とは、大体①②③までの人のことか。しかし、町によっては「町外の人でも信頼を得るに足る人は役付きを与えている町もある」(前出の先輩の談)という。

どの流れも「役付き」(*)の人によって運営されるが、純粋に各町の出身者や在住者でないと成れないということでもなさそうである。やはり人物的にきちんとしていて、信頼を得るような人は「役付き」をいただいている。

全体のパワーバランスでみた雰囲気では、山笠に対する個々人の思い入れやしきたりに対する受け止め方の重みでは、多分に知らない者ゆえの誤解を含めて言い切ると、①>②>③>④>⑤>⑥となり、それが参加人数で見ると、正反対とまでいかないが、それに近い状態なのかもしれない。

ちなみに私の場合は⑥に該当する。公認会計士である箕原年樹さんにお声をかけていただいた。その箕原さんも約20年間参加しているが立場は私と同じ⑤か⑥である。私が参加させていただいている中石堂町は、旧博多部の中でもとくに人口も事業所も減少が著しい。そうした現実の状況がある一方で、歴史と伝統を受け継いできた山笠は、博多のまちの四季の商売や暮らしの営みがあってはじめて成り立つ祭事である。例えば、ゴールデンウィーク中に開催される「博多どんたく」には相当な資金と準備を要するといわれるが、山笠に参加する旧町ではこちらにも参加していることも多い。私のように1週間だけ山笠に関わる外部の人は、あとの1年間の苦労とは無縁で気楽で美味しいところどりののだとあらためて思う。ただ、山笠の場合いろいろな形で参加している人が多いことが、賑やかさに繋がっていることも事実だ。いろいろ聞いてみたところでは、④⑤⑥で全体の参加者の半分以上を占めているという感じである。

その場合も、参加者は各町のいずれかの家の「預かり」という立場であり、当該町の法被を着用して、その町や家のしきたりを守ることが要求される。

中でも法被のもつ重みは極めて大きい。以前、加勢

七本の各流れを構成する町(平成13年度、順不同)

<p>一番山笠大黒流れ 須崎町(一区、二区、三区)、古門戸町(一区、二区)、対馬小路(一区、二区)、麴屋番、寿通、川端町、川端中央街、下新川端町</p>
<p>二番山笠東流れ 御供所町(一区、二区)、東長寺新道、上奥堂町、上桶屋町、下桶屋町、北船町、上普賢堂町、下普賢堂町、普賢堂町、魚町、上東町、下東町、上浜口町、中浜口町、下呉服町</p>
<p>三番山笠中洲流れ 中洲一丁目、中洲二丁目、中洲三丁目、中洲四丁目、中洲五丁目</p>
<p>四番山笠西流れ 奈良屋町(一区、二区、三区)、網場町、店屋町(一区、二区)、冷泉町上(一区、二区、三区)、冷泉町下(四区、五区)</p>
<p>五番山笠千代流れ 千代一丁目(一区、二区、三区、四区、五区、六区、七区)、千代二丁目(一区、二区、三区、四区、五区)、千代三丁目(一区、二区、三区、四区、五区、六区、七区、八区)、千代四丁目(一区、二区、三区、四区、五区、六区、七区)、千代五丁目(一区、二区、三区、四区、五区、六区)、千代六丁目(一区)</p>
<p>六番山笠恵比須流れ 網場町、中間町、上金屋町、下金屋町、横町、上堅町、中堅町、下堅町、中石堂町、官内町、蓮池町</p>
<p>七番山笠土居流れ 西方寺前町、浜小路、行町、片土居町、上土居町、中土井町、下土居町、川口町、大乘寺前町、上新川端町</p>

町(かせいちょう*)としてある流れに参加していたところでは、流れ全体で統一デザイン法被へと移行していった状況に対して、自町の法被の伝統を尊重して、山笠自体への不参加をとり決めたところもある。各町の法被に対する想いは想像を超えて強いものがある。

●「地元の人」のカテゴリーがもつええかげんさ
山笠に出ていると「地元の人＝「博多のもん」という言葉に出くわす。実はこの言葉のもつ「ええかげんさ」がいろいろな参加を許容しているように思える。

旧町内出身の方からみれば、各流れのルーツをくむ当該町と、これまで何らかの理由で解散した流れなどにルーツをもつ加勢町をあわせたところが「地元」ということになるかもしれない。

しかし、私の場合、他県の人に自分が山笠に出ている

ることを紹介する場合、自分を「外からの参加者」とは言っていないような気がする。居住地は郊外で、勤め場所は同じ福岡市でも博多ではない天神であり、きっと本来の括りからは違うのだと思うが、その時だけは「地元」ということで受け取ってもらいたいという気持ち、ご都合地元主義の気分があるのだと思う。

私が所属している中石堂町の場合、福岡在住中に山笠と出会い、その後、転勤などで東京や大阪に移り住んでいても、その時期には博多に戻ってくる人が大勢いる。まるで山笠で里帰りといった雰囲気である。

今回いろいろな方に話を聞いたが、博多出身ではない、そうした山笠里帰り組が参加している町は結構あ

るように思えた。

最近の山笠は追い山見物に90万人もの人が集まる福岡市の観光資源にもなっていて、観る人、参加する人の双方が気分よく過ごせるが、戦後の博多のまちでは一時期若い人の山笠離れが著しく、また「締め込み(ふんどし)姿が現代風でない」という投書が新聞に寄せられて論議を呼んだ時代もあった。

しかし伝統としきたりを強く重んじる一方で、各町がそれぞれ「ええかげんさ」を保ちながら、それでいて参加者の全員が「これからも続く」と思って毎年夏を楽しみにしているところが、750年余の伝統をもつ山笠の当世の事情かもしれない。

皆様から寄せられた「よかネット」への御意見、近況などの紹介②

前号に引き続き、みなさんからお寄せいただいたハガキの一部を紹介します。(順不同、敬称略)

■全国的に地域計画関係の調査が激化していますが、九州の方はどうですか。いつもよかネットを楽しみつつ感心しつつ読んでいますが、つくる苦勞もひとしおかと思えます。(さいたま市 佐藤隆雄)

■建設CALIS/ECといってもなじみがないかも知れません。今はやりのIT(情報技術)を使って電子入札公共事業合理化のお手伝いをしています。(千葉県 西岡誠治)

■今年の再開発事業の補助金は東京圏50%、大阪2%だそうです。今やっている物件でも住宅1,000千円/坪以下(900~950)、商業テナント4,000~5,000円/月坪でなかなか成立しません。(京都府 河上隆志)

■このところ日本全体の景気回復の兆しが見えず、さらに建設業界そのものも一段と冷え込んでおり、簡単に出口が見えてきそうにありませんが、こういう時こそ一人ひとりがじっと我慢し、みんなで力を出しあい、日本の夜明を造っていかねばと思っている今日この頃です。(福岡県 満生忠雄)

■1970年代に4年間過ごした九州各地のなつかしいニオイをいつも懐かしく読んでいます。上郡・万膳院の話も良かったです。昨年上郡町の組合区画整理の初期の仕事で数回行き、テクノポリスも見ましたが、こういう形の批判が一番ですね。(兵庫県 小林郁雄)

■いつも面白い話題をありがとうございます。ところで九州を独立圏として考えたとき、国際収支、国防などはどうなるのでしょうか。北海道は東京依存が大きすぎて、とても独立できないそうです。

(東京都 小浪博英)

■いつも貴重な情報ありがとうございます。個人のHP開設していますので、機会があったらのぞいてください。URL<http://www2.ktarn.or.jp/~sfukuda/>

(佐賀県 福田信也)

■昨年度、兵庫県加美町の農村地区で景観条例に基づく景観住民協定第一号に関わりました。すばらしい農の風景を大切にしていきたいものです。

(大阪府 澤 一寛)

■昨年12月末にサラリーマン生活を止め、3月から自営で個人事務所をスタートさせました。この間の変化で一番大きいのは、内部打ち合わせの会議に出席しなくてよいということ。自分のために時間をフルに使えるのはいいことです。

(神奈川県 柳沢 厚) (株C-まち計画室)

■7年間くらい「有明海の再生問題」に取り組んでおります。諫早湾の閉め切り問題もさることながら、海底陥没問題、ノリ養殖の酸処理問題、大牟田のダイオキシン問題等々、「海の複合汚染」が最近の「有明海問題」を引き起こしているようです。

(柳川市 平川硬一)

■地域におけるNPOやボランティア活動をみてみると、行動・実践の中でビジョンやストーリー、事業のあり方を組み立てていく時代に移行していると実感しています。

(佐賀県 金井萬造)

※1) 山笠では各流れの運営に携わる役職を設けている。各流れや町によってシステムは異なるが、赤手拭、衛生、取締、総務、総代などがあり、その他、博多祇園山笠の全体の運営に携わる山笠委員の役職もある。若手を統率する赤手拭は若者のあこがれの的といわれる。

※2) 昭和41年の町界町名整理によって解散した流れや、それ以前に他の流れに加わっていた旧町の中には、他の流れからの参加要請（あるいは他の流れへの申し入れ）に応じて山笠に参加しているところも多い。その場合、他の流れへの参加の是非の意思決定は、町内での採決でなされる。各町では他流れに参加しても伝統ある法被を守ることが重要といわれる。

(おざきまさとし)

■甘木・朝倉地域も市町村合併問題などの課題を乗り越えて「甘木・朝倉はひとつ」の理念のもとに行政・住民一体となった地域づくりに取り組まなければならないと考えています。(甘木市 釜掘文男)

■7月4日から「北九州博覧祭2001」が開催されます。昨年の4月から博覧祭協会で集客部門の統括していますが、現今の経済状況のなかでは前売入場券の販売にも苦勞しています。しかし“21世紀の北九州市”をお見せする最大の機会です。ぜひ、今年の夏は「北九州博覧祭」へおいで下さい。

(北九州市 丸山野美次)

■情報化社会の中で生活していることらしいのですがとにかくおもしろいのは「生の情報」です。NO51の「編集後記」に目がとまりました。その地域での宝に祖父の方が、そして時が流れて今の所属の方が関わりを持つ。これこそ生の歴史そのものだと思います。

(春日市 伊集院豊磨)

■下関にて観光の拠点、フィッシャーマンズワーフの建設に関わっています。新水族館、新唐戸市場で相乗効果です。海峡都市、下関が動き出しました。

(下関市 中尾友昭)

■みずから高齢化社会をおし上げる年になり、この不景気(特に大阪では)は大変厳しいものがあります。しかし、時代は変わりつつあります。地域の開発ではなく地域の蘇生へ。ストックをどう再生するかが重点テーマです。キーワードは蘇生、再生です。

(奈良県 宮本孝二郎)

■「JR九州和菓子作り日帰り体験の旅」紹介いただきありがとうございます。和菓子の奥深さを感じていただき、その感性に頭が下がるばかりです。若い

地引き網と鳴き砂にふれた1日

梶原 里香

朝から強い日差しが照りつけていた7月15日、グラウンドワーク福岡のレクリエーション事業として行われた二丈町深江海岸での「地引き網」に参加しました。

●人の力で網を引き寄せるのは300メートルほどの距離

お昼過ぎには深江海岸に到着したものの、私たちの前に網を引いていた人たちがまだ終わっていないとのことだったので、しばらくバーベキューをしながら待つことになりました。お腹もいっぱいになった頃、網

女性の方々がこれほど参加していただくとは予想しておらず、更に研鑽を心がけたく存じます。

(佐賀県 村岡安廣)

■地方自治法が改正され、これからは自治体の創意工夫、広い意味での経営センスが問われると思います。そのような中で「よかネット」が発信している地域情報は遠隔の地にいる私にもいろいろな示唆を与えてくれます。マスメディアに載らない地域情報を今後も鋭くキャッチして発信して続けて下さい。

(埼玉県 山本正典)

■新しい仕事はコンサルティングということで同業ということになりました。上手く連携できればと思っていますので宜しくお願いします。

(東京都 山口泰久)

■「都会の中の現代田舎暮らし」への関心に激しく高まって来たことを感じます。農村回帰ではなく都市近郊で「懐かしい未来」のライフスタイルを実践すると、田舎暮らしから一歩すすんで都市生活のなかに周囲の憩いを創造していく時代に気がつきはじめました。いいことです。

(愛知県 津端修一)

■色々な角度から、まちをながめているような「よかネット」の切り口にハッとさせられたり、勉強になったり、いつも感動とともに愛読させていただいています。

(福岡市 松丸順子)

皆様からの近況報告のほか、よかネットへの御意見、激励が数多く寄せられました。これからも、皆様のご期待に沿えるよう、質の高いよかネットづくりを目指していきたいと思っています。

が引けるということでみんな海岸へ移動しました。

この日、私たちの前に網を引いていたのは、東南アジア系の留学生のグループだったようです。

砂浜には2台のモーターが置かれており、網も砂浜から1キロ弱という



大量にとれた魚

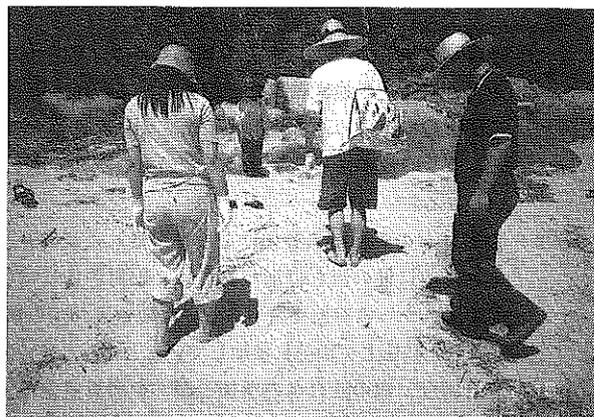
距離に引き寄せられていました。沖合まで投げられた網を人の力だけで引き寄せるものだと思います。こんでいた私は、モーターで引き寄せられだんだん砂浜に近づいてくる網を見てちょっとがっかりしてしまいました。

この地引き網は、魚のとれる量には関係なく1網7万円で体験でき、漁師の方が10人くらいスタッフとしておられました。モーターを動かしておられた方にお話を聞いたところ、地引き網は4月～10月くらいまで行っており、最近では幼稚園や子ども会などの利用が多くなっている、また、時期によってとれる魚が違い、6月頃はイカがよくとれるとのことでした。

網が砂浜に約300メートルに近づいたところで、全員でつなを引きはじめました。網だけでも結構な重量があるのに加え、大量に網に魚が入っているせいか、とても重く、引き寄せるの我々20人がかりでもかなりの力が必要でした。何とか網が砂浜に近づいてきたので、今度は砂浜にあげるため網を引き寄せます。網が水面からあがってくるにつれ、網の中に入っている魚がパシャ、パシャと飛び跳ねて四方八方に水が飛び散っていましたがそんなことは気にしていません。網の中に入っている魚の量に大きな歓声を上げながら砂浜に網をあげました。

●それまでの日差しがウソのように降った突然の雨

砂浜に網があがったところで、用意していただいていたかご（大きさは60×30cm、高さ20cmくらい）に魚をどんどん移していきます。みんなで網のまわりに座り込んでの作業です。とれた魚は、アジ、キス、小さな鯛、甲イカ、タコ、カニ、などなど。みなさん黙々と作業されていたので、この取れたての魚をバーベキューで食べるなんてほんと贅沢だなあ、などと考えていたのは私だけではなかったでしょう。最終的にとれ



みんなで鳴き砂を踏んでみる

た魚は、かご約6箱分にもなりました。

かごに魚を移す作業も最終段階にさしかかった頃、午前中の強い日差しがまるでウソだったかのように雨が降り始めました。地引き網のスタッフのみなさんにお礼を言い、みんなでかごをもってバーベキューをしていた場所まで急いで戻りました。しばらくは雨がやむのを待っていたのですが、なかなかやむ気配がないので、ヒラメとアジの大きいのを一皿ずつその場でさばいて刺身で食べました。バーベキューを楽しみにしていたものとしてはちょっと残念でしたが、ふだんスーパーなどで買って食べるお刺身とは比べものにならないほどおいしかったです。

●ふたたび鳴き始めた二丈町・姉子の浜の鳴き砂

地引き網をした日の午前中は、鳴き砂で有名な二丈町・姉子の浜の清掃を行いました。

きれいな浜にしか存在しないといわれ、砂浜を歩くと「キュッ、キュッ」と不思議な音がする鳴き砂は、無色透明の石英の砂の層が振動することで鳴るとされていることから、石英の量が重要でその量が70%以上あるものといわれています。中でも姉子の浜の鳴き砂は、環境の変化によって一度は鳴かなくなったものが、再び鳴き始めたという鳴き砂で、これは全国的にみても例がないということです。また石英が84%も含まれていて、音が鮮明で超一流の鳴き砂であるという鑑定結果もでています。

ちょうど海水浴シーズンということもあって、砂浜には多くのゴミが落ちていました。一通り砂浜の清掃を終えてさっそく鳴き砂の場所に移動しました。

広い姉子の浜の中でも鳴き砂がある場所はほんのわずかな範囲でしかありません。その場所を歩いて（というよりは強く踏み込む、あるいは強くすり足をする

といった感じ)みると確かに「キュッ、キュッ」と音がします。同じ姉子の浜の鳴かない砂と比べてみると、鳴き砂の方が砂の粒が細かく、ちょっと湿り気のある感じがしました。恥ずかしながら「鳴き砂」というのすら知らなかった私にとっては、「歩くと砂が鳴く」というのはとても感動的な体験でした。

砂を鳴かせるお手軽な方法として、小さな器に入れて先の平らな棒などでつつくと、これも良い音がします。

●鳴かない砂をはたして鳴くようになるのか

鳴かない砂を煮沸して乾燥させると鳴くようになったという話があるということから、この日同じ姉子の浜の鳴かない砂を持ち帰ることにしました。

日を改めていざ実験。鍋に砂を入れ沸騰させます。例えば油が浮く、といった変化もなかったため、沸騰することでどういう効果があるのかもわからないまま、水を3回ほど取り替えて煮沸し乾燥させました。完全に乾燥した砂をコップに入れてマジックの裏でつつくと、もともと鳴いていた砂とかわらないくらいきれいな音で「キュッ、キュッ」と鳴きました。

たまにはこういう自然の中のでていくことも必要な、と改めて感じた一日でした。(かじはらりか)

「国際青年の村2001in福岡」裏方体験談

小田 好一

7月30日～8月6日の8日間のプログラムで国際青年の村2001in福岡(以下青年の村)が開催された。私は、英語ができないにも関わらず、今年の3月に、国際青年の村実行委員会なるものに応募し、これまで裏方と

国際青年の村事業

目的：参加青年の相互理解を促進すること、外国青年の正しい日本理解を図ることなど

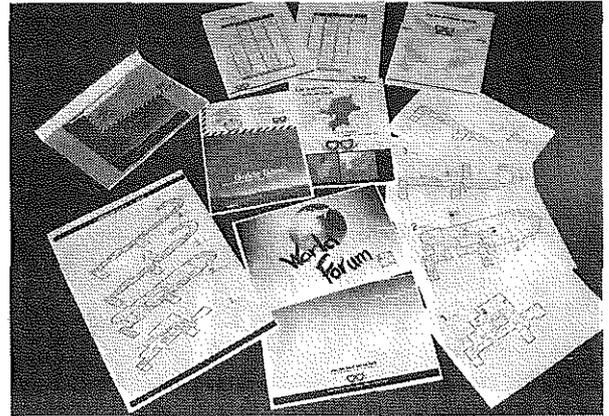
経緯：国連が1985年を「参加・開発・平和」をテーマとする「国際青年年」として設定した。その趣旨に基づく活動として我が国において具体化されたのが「国際青年の村」である。85年に第1回を国が実施して以来、毎年実施されている。87年度からは国と各都道府県との共催となっている。

主催：各都道府県(2001年度は福岡県)、内閣府、(社)青少年育成国民会議

参加者：日本青年 150名(各都道府県で公募)
外国青年 150名(内閣府の招へい事業参加者・16ヶ国)

会場：福岡県社会教育総合センター(研修施設・篠栗町)

実施運営主体：実行委員会(県内青年ボランティア)



私が今回の青年の村でつくった自己主張?の数々

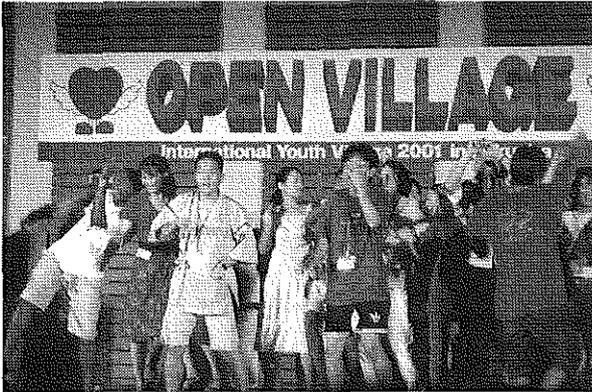
して青年の村の準備を進めてきた。青年の村の概要は以下のとおり。

実行委員会(以下、スタッフ)は総勢約110名の大所帯である。役割は細分化しており、実行委員会全体を把握するのはなかなか大変である。もちろん、自主活動なので報酬はない。スタッフを見て驚いたのは女性が多いことである。外国語に長けているのは女性が多いのか、7割以上が女性であった。

●みんなそれぞれ自分の実力を活かしている

4月頃、スタッフの役割を決める集まりがあった。私は、全体を見渡す業務に興味があったため、全体の事業計画を作成する「総務班」に決めた。期間中のスケジュール、人の動き等を示した「運営マニュアル」のとりまとめ、参加青年用の「ガイドブック」作成を行った。他のスタッフをみてみると、ツアーコンダクターのAさんは期間中のスタディツアーを受け持つツアー一班に、英語が上手なBさんはディスカッションプログラムを受け持つディスカッション班、パソコンが好きなCくんはポスター、ホームページ作成などを受け持つパソコン班など、(全員が全員そうであるとは限らないが)それぞれ興味のある活動の班についてようである。

このほか、ゴスペルをしているDさんは今回の青年の村のテーマソングを作曲した。歌の上手い人を集めて「天使にラブソング班」(映画「天使にラブソングを」から)なるものを結成した。スタッフのネットワークを使って、本格的なスタジオを借り、7部合唱のレコーディングを行ったうえ、パソコン班の協力を得て、曲をCD-R(CDプレイヤーで再生できる)に焼き付け、参加青年、スタッフ全員に配った。もちろん、期間中にそのすばらしい歌声を披露した。紙面で伝えられな



様々な民族の青年が“型”にはめられることなく、好きなように踊っている

いのが残念。作曲・編曲・作詞の技術、歌のうまさ、CDが個人でつくれるようになったことに驚いた。

私も、事業計画のとりまとめに飽きたらず、得意なパソコンお絵かきをみんなに披露したくなって、ガイドブックの表紙等いろいろ手がけた。

このように、スタッフの多くが自分の得意分野を活かしたくて参加している人だろうと思う。問題が起きたときの責任の所在を明確にしておく必要があるが、人件費なしでこれだけのことができるのだから自主活動のパワーはすごいと思う。

● “良い” 加減 (いいかげん) は自主活動の鉄則

自主活動は何の拘束力も持たないので、活動がイヤになったら、いつでもスタッフをやめることができる環境にある。活動を継続させるためには活動に嫌気がささない程度に、仕事の量を調節することが大切だと感じた。また、個人の負担に差がでないように心がけ、仕事の量を減らすことを考え、悩みをひとりで抱えないようにする環境づくりが大切である。

私の属した総務班は班長以下、みんなが“良い加減(いいかげん)”主義者だった。休日の活動は夕方まで、平日の活動も時間を決めて、それを超えたら次回にまわすなど、無理のない活動に徹した。良い加減が災いして運営マニュアルの完成は2週間遅れで開催日の前日に完成、ガイドブックも同じ頃に仕上がった。もちろん、良い加減さが原因でまわりに迷惑にならないよう、知恵を絞った。このほか、刷り上がった後の修正が総務班の負担にならないよう、ファイル形式にした。修正があれば、各プログラムの担当班が差し替え原稿を作成し、運営マニュアル、ガイドブックを持っている人が各自で差し替えできるようにした。このように仕事を分散するための知恵を絞った。

国際青年の村 2001in 福岡の参加国

オーストリア共和国、パキスタン・イスラム共和国
ブラジル連邦共和国、スロヴァキア共和国
キューバ共和国、南アフリカ共和国
ヨルダン・ハシュミット王国、トルコ共和国
リトアニア共和国、スウェーデン王国
メキシコ合衆国、ウルグアイ東方共和国
ミャンマー連邦、ジンバブエ共和国
ナイジェリア連邦共和国、大韓民国、日本

しかし、個人的には本来しなくていいパソコンお絵かきの仕事にハマってしまい、寝不足気味だった。

●作業の効率よりもスタッフの育成が重視されている

青年の村は今年で17回目となる。作業の効率、話し合いの効率だけを求めるのならば、各班に、これまでの青年の村のスタッフ経験者を配置することで、かなり多くのノウハウが得られると思う。しかし、たった8日間のプログラムのために約1年間(私が参加する半年前から準備委員会なるものが結成されていた。)も準備期間をとっていることから、効率は求めているようだ。

当事業はプログラムの大枠が決まっているのみで、ほとんど1から考える。その中で、みんなで知恵を出し合い、議論を深めるなかでスタッフの結束力も高まっていく。こうすることで優れたリーダー育成につながる、そんなもくろみがあるような気がする。

●郷に入りては郷に従え

青年の村では、各国の文化に応じて、様々な対応をした。

風呂：仮設のシャワーユニットを準備

料理：イスラム教信者、ベジタリアンに配慮して別メニューを用意

部屋：イスラム教信者のために礼拝室を準備

このほかにも、いくつか準備したものがある。国際社会・宗教を理解しないと読者からお叱りを受けるかも知れないが、この対応について私が思ったのが“郷に入りては郷に従え”ということである。せっかく日本に来ているのだから自国の文化を持ち歩くのではなく、日本の文化に触れてみては、といたい。しかし、ほとんどが日本民族である日本国に育った私なので、郷に従えという考えが生まれるが、多民族国家では、様々な文化・宗教のために対応するのが当然なのかもしれないということを少し考えた。すべての文化、

宗教の信者が支障なく生活できるということも「ノーマライゼーション」という言葉で置き換えられるならば、“郷に従え”とは言えない気がする。

●ダンスは国境を越える！?

期間中のプログラムには、施設周辺の住民も巻き込んで、参加青年、スタッフともに楽しむ祭典、「オープンヴィレッジ」がある。

各国紹介のブース、民族衣装の試着・撮影のコーナー、各国の出し物などがあつたが、私が興味を持ったのはダンスパーティーである。16ヶ国から外国人が集まっていることから、各国の民族舞踊など流れるのかと思っていたが、その予想は見事に外れた。流れていた曲はFMなどでよく耳にするダンスミュージックであった。ディスコのように思い思いに踊ればいいので誰でも気軽に参加できる。ある国だけが盛り上がる民族舞踊よりも、みんなが聞き覚えのある曲の方が全員が一体となって盛り上がるようだ。「YoungMan」が流れたときにはみんなが一緒に腕を頭の上にかざし“Y”“M”“C”“A”と踊っていた。洋楽は英語圏でなくとも、世界中あらゆるところで流れていることを実感した。また、洋楽、ダンスともに国境を越えていることに驚いたとともに、英語を話すことができる人口がまだまだ少ない日本は世界に取り残されるような気がした今回の青年の村であった。(おだ こういち)

観光地の老舗、別府を巡る

～留学生とともに～

本田 正明

私が別府に行くのは2回目であり、小学生の修学旅行以来だった。近頃よく行く温泉地といえば、湯布院や黒川温泉ばかりだったので、別府に懐かしさを感じたのと、留学生が3名参加するので、何か新しい発見があるかもしれないと思って参加した。

この旅行は、私が学生のときにいた研究室の友達が、オランダやフランスから来ている留学生と週末をいっしょに過ごそうと企画したものだった。私が去年、たまたまオランダで、2ヶ月働いた経験があったので、話が弾むだろうと呼ばれたのだが、実際には通訳として、かなりこき使われてしまった。

●写真好きは日本人らしさ



貴船城から別府市内を眺める参加者たち

別府に向かうバスの中で、別府の印象を小学生時代のおぼろげな記憶をたよりにたどってみると、高崎山で猿を見て、地獄めぐりをして、杉乃井パレスで昼食とお土産を買った記憶しかなく、温泉とは入るところではなく「見る物」なんだとずいぶん長いこと信じていたことを思い出した。

参加メンバーは学生がほとんどであり、彼らは、バスに乗るなり、さっそく写真を取り始めたのだが、留学生たちは、なぜこんなところで写真を撮る必要があるんだろうと不思議そうな顔をしながら、いっしょに写っていた。別府についても、日本人は入り口や何か目印になるものがあれば、とりあえず写真を撮っておこうとするのに対し、留学生たちは自分が感動したり、印象に残ったところだけを写真に撮っていた。個人よって写真の撮り方は違うのだろうが、日本人が写真好きだと外国人に言われるのがよくわかる気がした。

●英語のガイドおじさんたち

別府はさすがに観光地の老舗であり、ちょっと道に迷ってきよろきよろしていれば、すぐに誰かが飛んできてアドバイスをしてくれたり、案内してくれた。ちよつとサービスが過剰な気もしたが、観光地としての自覚は高く、外国人でもわかるように、ジェスチャーなどの動きを交えて、説明してくれるのでとてもわかりやすかった。また外国人用の観光案内所にも寄ったのだが、てっきり若いお姉さんが受付をしていると思っていたのに、そこには普通のおじさんがたのしそつうに英語で案内をしており、ジョークもときどき交えながら、さまざまな国の人と会話をしていた。地元詳しい年輩の方が、英語をしゃべる姿はとても新鮮であり、別府には貴重な人材がいるのだなと感心してしまった。



独自に開発を行ったというロゴ入りタオル

ふらりと入った食堂では、お店のおじさんが多国籍な顔ぶれに大いに感動し、いろんな観光資料をくれるばかりか、あまり観光客がいかない穴場の場所を教えてくださいました。その中で実際に訪れた貴船城は、高台の上にあります。天守閣からは温泉の煙の上る別府市を一望することができました。その城のガイドをしているおじさんもまた英語をしゃべることができ、熱心に説明してくれたのですが、外国人にわかりやすくするために意識もちょくちょくしてよってもらっていました。貴船城は、ほとんど木材だけで立てられており、女の子たちは不安定な足場などにびくびくしていたのですが、建築に関心のある留学生は、ここばかりは日本人の誰よりも写真を撮る枚数が多かった。

●日本らしい土産といえば・・・

留学生たちは、別府であまり印象に残る土産を見つけられなかったのか、3人ともあまり買い物はしなかった。日本を出るときにも、何も買わないつもりなのか疑問に思ったので聞いてみたところ、英語の字幕があるならゲームボーイとデジタルカメラを買いたいと言っていた。やはり日本製の電機製品は質の高さに定評があるのだそうだ。彼らから見れば、それらの電機製品はりっぱな日本のお土産かもしれない。私は土産といえば、どうしても文化的なものを浮かべてしまうので非常に驚かされてしまった。

●別府のみどころとは？

別府を温泉街として見ると、今更ながらに不思議なところだなと思ってしまう。いくら温泉熱を利用してはいるからといっても、なぜ熱帯魚やワニを見せ物しているのだろうか。ましてや、動物園になっているところまである。スコットランドからきている女の子は、元気がない動物たちをみて、非常に不機嫌そうな顔を

していた。別府はなにやら、“うり”にするものをどんどん無計画に増やしすぎて、いったい何をお客にみてもらいたいのかわからなくなっているような気がする。入りたくなるような温泉の名前が浮かんでこないのは、自分の勉強不足もあるだろうが、本物の温泉地として別府の印象が薄いのではないだろうかと感じた。

地獄巡りにしても、目的のお湯を見るまでに、必ず土産物やさんを通らないといけなくなっているばかりか、富良野のラベンダー関連のお土産が並んでいたり、テレビのキャラクター商品など、別府とは全く関係ない物が数多くおいてある。10年以上も昔のマジックショーグッズが売ってあったのには驚かされた。売店の中には、独自に地獄巡りをモチーフとした商品開発を行い、他の売店でも販売していたりするのだが、どうも商売意識が強すぎて、客をもてなそうとか、客にいい気持ちになってもらおうという気持ちが薄いように思えた。ただ、外国の人にとっては、温泉自体がめずらしいものなので、素直に楽しめたそうである。観光なのだから、あれこれ深く考えるよりも単純に楽しめる人の方が、いい観光ができるのかもしれない。

（ほんだ まさあき）

おもしろいことは何でもやって ネットワークを広げる

～専業農家大いに語る 第3回～

愛甲 美帆、澤谷 真紀子

5年前から、春の「たけのこ掘り」冬の「みかん狩り」が、私的ネットワーク「だぼはぜの会」の定番となっています。毎回、おいしい山の幸と、好き勝手に山遊びを楽しむ我々（多いときは20名位参加）を受け入れて下さる松尾さん（福岡県八女郡立花町、松尾農園グループ）に感謝しつつ、都市住民とつながりを持つとしている松尾さんを紹介するのが遅れたことをお詫びします。

今回、「専業農家大いに語る」第3回会合で、その松尾さんに「地元の人とグループを作り、地域の魅力を発信している松尾農園グループ代表」ということでお話ししていただきました。以下お話ををまとめました。

●18歳の時の決意

もともと家が農家だった。農業高校を出た18歳の時にフィリピンや愛媛を見て回って自分が継ぐのなら、



立花のとれたて産品を福岡で販売するばあちゃん達

農業の会社を作りたいと思った。その頃、みかんが大流行で、日本中の農家のみかんを生産していた。そのため、昭和53年には大暴落し、このままでは農家は生き残っていけないと感じた。農協だけに出荷するのではなく、農家自身が顧客を掴まないと生き残れないと感じ、生協出荷に取り組もうとした。

生協に出荷するためには、生協が認める体に安全な基準をクリアする必要があるため、大量ではなく、手間をかけた産品を他品種作る必要があった。その頃、同年代の農業者が集落にいたことも幸いし、八女有機農家の会を発足し、農協以外のルートでの販売に取り組む仲間が増えていった。

●グループの経緯

1987年に、これまで松尾農園として個人で活動していたが、松尾農園グループへ名称を変更した。5名の会員からなる出荷組合のスタートだった。農作業や、もともと個人でやっていたバックセンター（玉葱やんにくをむき、冷凍用にバックする場所）を会員と協力するようになった。出荷先は主に生協で、初めはキウイフルーツ、里芋、みかん等を納入していた。

1994年よりグリーンピースやスナックエンドウなどの野菜も出荷するようになる。このとき会員は25名。しかし、翌年より注文に応えるために3倍の量の生産を求められた。今は3割増しになっている。

現在、正会員は専業農家と兼業農家合わせて36名、その他の会員を含めると、50世帯が参加している。年齢層は20代から70代まで幅広い。生産する品目は57種類に及ぶ。各品目はそれぞれの部会に分かれている。化学肥料は一切使用せず、牛・豚堆肥を中心にした有機肥料で栽培していて、各生産者は同一基準で施肥・防除を行うなど品質管理を徹底している。

出荷組合なので、出荷した量がそのまま自分の利益となる。出荷先は生協が80%、残りは地場のスーパーや、商社を通して東京首都圏・大阪への販売である。グループ全体の売上は生協ルートで約2億円。1軒100万円～1,200万円となっている。1軒の売上1,000万円を目標に掲げている。

●ばあちゃんパワー全開

当初、会員のばあちゃん達にはバックセンターで玉葱をむいてもらっていた。しかしそれは若い人に譲り、野菜を作って「100万円儲けよう」ともちかけた。少額でも自分の通帳を持ち、その中から孫に小遣いをあげる。また、家族と一緒に取り組むので、若い嫁との関係がうまくいくようになった。更に、せっかく貯金をするのなら皆でグアム、いやいやハワイに行こうということになり、3泊5日で旅行にも行った。

目標をもって仕事をする元気なばあちゃんが増えたが、稼ぐのは年間150万円以下と決めている。それ以上稼ぐとなると競争意識が強くなったり、体壊すと考えるからだ。

●中国の脅威

中国でのオーガニック野菜（無農薬・有機栽培）の認定を視察に行く機会があった。中国は新しいもの（ハイウェイ）と古くからのもの（田園風景）が一緒になっていた。日本と草の質が変わらないところで野菜・茶・梅などを生産している。日本の商社が厳密に品質管理して認定を受けた野菜は日本とヨーロッパに50%ずつ出荷され、エンドウなどの豆類もすぐ食べられる状態まで加工、冷凍して出荷されている。

視察したところは、茶畑にして100町歩、梅畑にして50町歩生産していた。国から土地を借りて地代を払い、採れた作物を自分で売るというシステムで、1日25円の日当で相当数雇っている。

このように、九州から飛行機でわずか1～2時間圏の中国では安い人件費でオーガニック野菜が大量生産されている。日本にとっての驚異は迫っている。

●いかに消費者をつかむか

農業で生き残るためには以下の点だと考えている。

- ①人件費で勝つことはできないが、お客さんに直接販売し、目で見て感じてもらう。
- ②消費者は安い方に走るだろうが、その野菜よりも質の良いものを作る。
- ③今のうちに消費者ネットワークを増やし、仕事を

若い人に割りふる。

●町の魅力をもっと語ろう

町の人にとっては山の中にある珍しくないものでも都市の人にとって魅力的な資源（例えば葛籠）がいっぱいある。都市の人と交流して、立花町の良さをもっと知ってもらいたい、何よりも町の人がそれを語る場が欲しいと思った。

今年、小さな販売所を中心に都市との交流を担当する有限会社を作った。この販売所は4年前、閉店することになった酒屋を駄菓子屋で子どもが100円の中で計算してお菓子を選ぶような気持ちを大事にしたいという気持ちから買ったものだ。その店に通っていた茶髪の子がバイトにきて、よく働いてくれる。最近そこに特設「角打ち」コーナーも作った。いずれは現在出荷組合である農園グループを農業法人にして生産部門と交流部門という役割を分担をきちんとしたい。また、季節折々の催しを企画し、生産者間の親睦を深めることも、ここを中心に進めるつもりだ。

●ここでできることなら何でもOK

最近では、ホテルがみられる季節にネットワークのある人をお誘いしたり、ミニコンサートを開いたり、農業だけではなく、立花町の魅力を違った形で引き出しながら、都市住民との交流を図っていらっしやる。

松尾さん自身の大らかで暖かい人柄と農業にとどまらない活動が、地域の人を巻き込み、まちの魅力を内にも外にも発揮できる場となっています。このつながりがぐるっと回って松尾農園グループのネットワークになるのだらうと思いました。

(あいこうみほ、さわたにまきこ)

農業のサービス化がままならない

～意識はいまだカロリー製造・供給業～

糸乗 貞喜

農産物が、私達の肉体の再生産に携わるものとしてのみ評価されるならば、農業はカロリー製造供給業となる。8月になると、1945年の8月15日の快晴の空と敗戦のクチコミによる空気の変化、それに空腹の日々が想い出される。その空腹を癒すものとして開発されたのが「農林〇号」とかいったサツマイモで、本当にまずかった。このサツマイモには“カロリー製造以外は絶対に意識しないぞ”といった気分が表れていた。

嗜好品である清酒でさえも、第二次戦争中から戦後にかけて、原料米の不足を補うために、アル添仕込み法とか三倍醸造法という方法で、増量が試みられていた。

ところが今や“純米酒”とか“吟醸酒”などと「量から味覚へ」が定着している。もちろん農産物も水産物も同様の流れで、“炭水化物・タンパク質・ビタミン含有量など”の供給業ではなく、まさに“食味”重視になっている。これは、食料品の中に占めるカロリーのウエイトがわずかになり、食味情報産業化が大幅に進んだと考えられる。つまり、1945年の日々には、空腹を満たすカロリー百パーセント時代であったのが、今や「食味情報社会」へ転換しているのである。

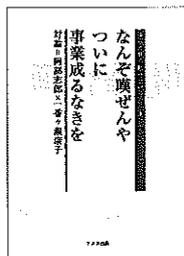
最近面白い経験をした。

「活き鱈を使った“あじのひらき”」という商品の見本を見たが、それはすばらしいものだった。とにかく、干物になった鱈の肌が、艶やかに輝いていた。視覚から見ても、いかにもうまそうだった。食べてみても、確かに一味違った。そのうえ、「活魚、天日干しに、こだわりを持っていますので、すぐにはできません」という注釈までついていた。情報化率90%ぐらいの漁業が成立している。

ここまで来ると、食いしん坊の糸乗ならずとも、「あの野郎に送ってビックリさせてやろう」ぐらいの気分は起こる。そこで、友人の氏名・住所を書いてFAXしようとして、電話をかけた。電話をとった人は、「はあ、若いもんはおらん。いつ帰るか?! 黙って出たので分からん」こんな感じが三回。女の子は「お母ちゃんはおらん。FAX?」。最後は娘さんに近い感じの女の子「携帯の番号を言います」。そこで私は携帯へ。[FAXは故障しています。インターネットで送って……]。ところで小生は、インターネットが大の苦手。やむなく、既にFAXように書いているリストをコピーして封書で……。

いやはや大変な時代になってしまったもんだ。

最初に電話に出た人は、おそらくカロリー産業の戦士として、農林省や農協からやいやいや言われていたに違いない。農山漁村は、まだカロリー産業のシステムにドブプリ浸かっている。ところが、情報化しないと生きていけない。消費者のニーズに合わせせられるシステムにするには、どうしたらいいのだろう。



なんぞ嘆ぜんや ついに事業成るなきを

対論 = 阿部志郎
× 一番ヶ瀬康子
ドメス出版

○常に時代の最先端を行く福祉のはなし

当社ネットワークの飯沼和正氏よりFAXでこの本を紹介していただき、翌日には本の部分的コピーが送られてきた。これはただ事ではない、「早く買え、早く読め、君の為になる」というシグナルだと思った。

時代の最先端といっても「最新の技術を駆使して」「ITで福祉現場を効率化して」といったものではない。常に、住民と関わりながら、地域の将来予測をしっかりと行い、それに合った事業を行ってきた社会福祉法人横須賀基督教社会館（以下「社会館」）の50年に渡る取り組みの話である。この本は社会館で45年目を向かえた館長の阿部氏と福祉研究の大家である長崎純真女子大学教授の一番ヶ瀬先生との対話形式で成る。

○戦後直ぐ、地域のニードに応え続けた教会

社会館の始まりは、戦後、米軍初代の海軍司令官デッカーという人が横須賀の市民文化を高めるために旧アメリカ海軍の施設を使って医療・教育・福祉の仕事をしてくれないかとキリスト教関係者に呼びかけたことからなる。社会館の事業は50年間で多岐に渡るため年表を参考としていただきたいが、最初の「米軍基地に働く日本人通訳のために英語講習会開始」の時点からサービスの目的と対象となる人がはっきりしていた。社会館の意義である「必要とする人のための施設であり、ニードがあって事業は成立する。決して、その逆ではない」の精神は、全ての事業において貫かれている。

○役割を終えれば消滅する

年表をみると、廃止・閉鎖（又は移譲）された事業がある。例えば、1955年に憩母子寮が開設されるが、1969年には廃止されている。この時のことは、民生委員と激しく対立し、廃止に3年かかったと書かれている。これからの時代は母子寮じゃないと母子相談・学童保育に切り替えた経緯などは、社会館の「先駆的役割を負い、常に成長し続けることを目指す」という姿勢にあらわれている。また、肢体不自由児保育部などは地域の先陣を切って行い、地域で認知され、行政が行

った方が子どもの為に良いと判断された事業については行政に移譲するといった態度をとっている。また、行政からの補助金などをもらわないといった自立の精神がある。

○福祉のシンクタンクを設立

1992年には「地域福祉研究所」というシンクタンクを設立しているが、この前身であろう様々な調査の中で一番ヶ瀬先生が行った「子どもの生活圏」調査が紹介されており、その調査の過程がおもしろかった。

母子寮の子ども達の暮らしを探るのに、自転車で後をつけたら、長い糸の先に磁石を付けてお賽銭を盗んだりしていた等、調査対象の目線で、ありのままの生活を調査されている。

○タイトルは寺の一角にあった漢詩から

このタイトルは、「なんぞ嘆くことがあるか、事業がついに実を結ばなくても」という感動的な意味があり、阿部氏は読んだ瞬間に、「社会館は一代で成るのではなく、二代、十代、と受け継がれながら完成に向かうものではないか、これからの私の使命は継承にあり、ひとつの節目を担うにすぎない」と感じたそうだ。

この本は感動するところがあまりにも沢山あり紹介しきれません。福祉だけでなく、地域の先端をいくということがどういうことなのか、という意味でも是非、手にしていただきたい。（澤谷 真紀子）

社会館50年の歩み（一部事業のみ抜粋）

西暦(年)	事業沿革
1946	米軍基地に働く日本人通訳のために英語講習会開始
1947	児童クラブ開設、授産部開設(未亡人対象)、図書館開設
1948	善隣園保育所開設 個人相談部開設(後家庭相談所と改称) 友愛寮開設(勤労青年及び学生の寮)
1949	乳幼児健康相談所開設、横須賀文化服装学院開設
1952	老人クラブが組織され社会館に事務局を置く
1955	憩母子寮開設
1958	愛育園(肢体不自由児保育部)開設
1959	善隣園に乳児保育クラス開設
1962	乳幼児健康相談所を家庭相談所に統合
1963	学童保育開始
1966	愛育園閉鎖(横須賀市に移譲)
1969	憩母子寮廃止
1972	幼児プログラム開設 家庭相談所廃止(親切された北部保健所に移譲)
1973	地域民生委員等が中心となり老人給食を開始 夜間英語学校廃止、田浦洋裁学院廃止 児童・青少年クラブ廃止
1975	「善隣園を良くする会(父親の自主活動)」結成
1978	善隣園、障害児保育開始
1987	善隣園、障害児保育開始「遊びの会」開設
1988	学童保育の障害児をもつ父母達の自主グループ結成 ダイサービスセンター喜望の園起工式 障害児のためのおもちゃ図書館実施
1990	地域福祉研究所開設
1991	喜望の園在宅介護支援センター開設 老人介護事業の委託を市より受ける
1993	善隣園、育児教室・子育て相談開始
1996	本館で事業開始

「分権時代の地域経営・自治体運営を考えるセミナー」開催企画

○内容

地域経営と分権化が潮流となっています。従来、地域経営は住民の目に届きにくいものですが、その一方で自治体行財政は地域全体を考える視点を展開できず、その結果、大きな問題をえることになりました。

分権時代にあつては、行財政、自治体、民間、住民がどのように連携を図り、地域特性發揮していくか、という視点が欠かせません。地域特性を活かした官民協力と住民参加を重視した行財政は今後どう実践していけばよいのか、事例をみながら一緒に考えたいと思います。

○開催日 平成13年10月5日(金)～6日(土)

1日目 13～17時 パネラー4～5名によるセミナー
18～20時 懇親会

2日目 エクスカーション

○開催場所 福岡市内のホール予定

(詳細は後日お知らせします)

○問い合わせ先

(株)よかネット 尾崎・糸乗

TEL: 092-731-7671

FAX: 092-731-7673

e-mail: ozaki@yokanet.com

○推進団体

主催: 第3セクター研究学会

(金田昌司会長中央大学教授)

後援: 九州第3セクター研究会

(伊東弘文会長九州大学教授)

(財)福岡県市町村研究所

(協)地域づくり九州

(株)よかネット

○テーマ

○産学官民の協力による地域経営をどうすればよいのか、事例を通して検討する。

○地域経営の視点でみた行財政の役割は何なのか、一緒に考える。

○広域連携の中で地域自立を目指した取り組みをどうしていくのか、今後のことを考える。

編集後記

今年夏は特に暑かったのですが、盆休み、田舎に1泊したとき、朝方は私の居住地であるマンション地帯に比べて確実に2～3度程涼しく感じました。(田舎といっても小さな商店街の一角にある)

我がマンション地帯周辺は、アスファルトやコンクリート面が多く、熱を吸収してくれる緑や土が少ないことを改めて知らされた夏でもありました。

都市居住とは利便性とは裏腹に、冷房があるとはいえ居住面では非常に損をしているようだ。(や)

昨年、志摩町で行われるいろんな行事に参加させてもらっているのだが、今年は海岸でのライブイベントの設営に参加したり、劇団に参加させてもらったりと盛りだくさんの内容になっている。

劇団の旗揚げ講演は10月と迫っており、時間の余裕はあまりないのだが、芝居の稽古で、腹の底から声を出すとスカッとしたいい気分になれる。ストレス発散にもなっているようである。(ほ)

よかネット No.53 2001.9

(編集・発行)

(株)よかネット

〒810-0001 福岡市中央区天神1-15-35 ホンダハピエ5F

TEL 092-731-7671 FAX 092-731-7673

http://www.yokanet.com

mail: info@yokanet.com

(ネットワーク会社)

(株)地域計画建築研究所

本社 京都事務所 TEL 075-221-5132

大阪事務所 TEL 06-6942-5732

名古屋事務所 TEL 052-265-2401

東京事務所 TEL 03-3226-9130